

<「知るっば!久留米」 令和3年3月11日(木) 12:30~放送分>

高島野十郎 ～第2回～ 「高島野十郎の青年期」

<ゲスト：久留米市美術館 学芸員 中山景子さん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

今月は、『高島野十郎』をテーマに彼の生涯とその作品についてお送りしていきます。

ゲストはこのかたです。

ゲスト:中山景子さん(以下「中山」)

久留米市美術館で学芸員をしております中山です。

よろしくお願いします。

坂本 第2回目の本日は、『高島野十郎の青年期』をテーマにお話をうかがいたいと思います。

中山 野十郎は今から約130年前の明治23(1890)年に、久留米市の東合川に産まれました。

当時の高島家は、「千代の友」という銘柄の清酒を醸造する資産家でした。

野十郎はその高島家の、六男二女の五男として産まれました。

坂本 野十郎は五男坊だったんですね。

そんな野十郎さんは、いつ頃から絵を描き始めたのですか？

中山 やはり少年時代から、絵を描くことが好きだったようです。

現在の明善高等学校にあたる中学明善校に通っていた頃には、

既に本格的な油彩画を描いています。

明善校を卒業する頃の写真がありまして、

そこには、パレットと絵筆を持ってポーズをとる野十郎の姿が写っています。

ですので、10代後半にはもう、画家になることを夢見ていたと思われます。

坂本 明善高校というと、私の先輩になるんですね。

でも、野十郎さんは卒業しても美術学校などには行かなかったんですよね？

中山 野十郎は美術学校や画塾に通うことなく、独学で絵を学びました。

また学業も優秀だったので、中学明善校を卒業後は、名古屋の旧制第八高等学校に進み、

さらに東京帝国大学の農学部水産学科に進みました。

坂本 東京帝国大学は、現在の東京大学のことですよ。
理系の学科に進んだことは、画家になることとは、全く別の進路のような気もするのですが。

中山 大学在学中は、絵の制作と学問の研究を両立していたようです。
それでも学内での成績は抜群によく、授業料免除の特待生に選ばれたほか、
水産学科を首席で卒業しています。

坂本 それは、すごいですね。

中山 大学では魚の感覚に関する研究をしていたようで、その時の魚介類のスケッチが残っています。
魚の骨格の細かい部分まで丁寧に観察し、鉛筆で記録したものなのですが、
絵としてもとても見応えがあります。

坂本 私も展覧会で拝見いたしました。
非常に細かいところまで描かれていて、学術資料として1級品ですし、
絵の作品としてもすごいと感じました。
野十郎には、大学での研究を続けて、立派な生物学者になる道もあったと思うんですよ。
でも、最終的にはその道を選ばずに絵描きになったんですね。

中山 野十郎は、早くから画家になることを望んでいたと思いますが、
当時の社会で、画家として身と立てることはとても難しく、家族の理解を得ることも大変でした。
野十郎は、大学在学中も
「自分がこれから、生涯をかけて取り組むべきことは何か。周囲に反対されても画家になるべきか。」
と悩んでいたのではないかと思います。
そして、大学卒業後に念願だった画家の道を選びます。

坂本 東京にとどまって、本格的に画家の道、絵の制作に打ち込んでいくわけですね。

中山 一時的に久留米の実家に戻ることもありましたが、
画家を本格的に目指すようになってからは、東京で長く暮らしました。
野十郎が30歳の頃の大正9年には、上京していた坂本繁二郎や古賀春江、
松田諦晶（まつだていしょう）といった、同じ久留米市出身の画家たちと会っていた記録があります。

坂本 同郷の坂本繁二郎や古賀春江と野十郎が同じ時代というものなかなか興味深いですね。

中山 坂本繁二郎と青木繁は、野十郎の8歳年上、古賀春江は5歳年下でした。
みな明治生まれ、久留米出身の洋画家たちです。

坂本 何人もの久留米出身の画家たちが東京で活躍していたというのは、誇らしいですね。
野十郎が30代までの青年期に描いた作品は、どのようなものがありますか？

中山 青年期には、自画像を4点描いています。
傷ついて血を流す姿、修行僧のような身なりでこちらを睨む姿、
意味ありげにリンゴを持って見せる姿など、どれも強烈な印象を与える自画像です。
そして、どの自画像も「自分が信じる絵の道を究める」といった決意が表れているように見えます。

坂本 今、図録を拝見しているところですが、自画像は目力のある何とも言えない表情をしていますよね。
野十郎が信じる絵の道といいますか、野十郎はどんな絵を目指していたのでしょうか？

中山 実は、野十郎は10代の頃から仏教に関心を抱いていました。
ひと回り年上の兄・高島宇郎(たかしまろう)は、久留米で初めての近代詩人で、
禅宗に深く傾倒した人でしたが、その宇郎の影響もあって、仏教世界への関心を深めていきます。
野十郎は、おそらく「自分は絵の道で、仏教が説く世界の真理を見いだしていくのだ」
といったことを考えていたのだと思います。

坂本 なるほどね。そうやって見ると、自画像の表情の中にある決意のようなものを感じますね。
絵で、仏教の真理の世界に近づいていく、まさに修行僧のような画家に思えますよね。
その後、野十郎がどんな絵を描いていくのか、さらに興味がわきました。
久留米市美術館の中山さん、今日も興味深いお話をありがとうございました。
久留米市美術館では、生誕130年を記念して「高島野十郎展」を4月4日まで開催しています。
次回は、『高島野十郎の壮年期』についてお話をうかがっていきます。
おたのしみに。